

國學院大學學術情報リポジトリ

The Nihon Ryoiki and the Kon-go-han-nya-kyo-shu-gen-ki : A Note of the Power Inherent in the Buddhist Scriptures

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Yamaguchi, Atsushi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000050

『日本靈異記』と『金剛般若經集驗記』

— 經典の持つ「力」をめぐって —

山口敦史

一、はじめに—『日本靈異記』と『金剛般若經集驗記』

弘仁年間に成立したとされる『日本靈異記』が海彼の典籍の影響を受けていることは、多くの識者の指摘するところである。特に、『冥報記』と『金剛般若經集驗記』については、『日本靈異記』上巻序文で書名が挙げられている。

昔、漢地にして冥報記を造り、大唐国にして般若験記を作りき。何ぞ、唯し他国の伝録をのみ慎みて、自土の奇事を信じ恐りざらむや。粵二起ちて自ら矚るに、忍び寝ムコ

ト得ず。居て心に思ふに、默然ルコト能はず。故に聊かに側二聞けることを注し、号けて日本国現報善惡靈異記と曰ふ。上・中・下の参卷と作し、以て季の葉に流フ。

ここで景戒は、「冥報記」「般若験記」の名称を挙げて、「他国の伝録」だけ尊重して、「自土の奇事」を顧みなくてよいのか、という趣旨のことを述べている。ここでの「冥報記」とは、唐の唐臨撰述の同名の『冥報記』（全三卷）のことだとされている。唐の高宗の永徽年間（六五〇～六五五）の成立とされる。そして、「般若験記」については、『金剛般若經集驗記』（全三卷）の略だとされる。『金剛般若經集驗記』は唐の孟献忠

の撰述。玄宗の開元六年（七一八）の成立だといふ。³

『冥報記』については、『日本靈異記』下巻第十縁に、「河東の練行の尼の、写せる如法経の功茲に顕れ」という語句があり、これは『冥報記』上巻第四話「河東練行尼伝」に掲載されている。「河東の練行の尼」が法華経の写経に際して、自分の息がかからないように竹筒で屋外に出していた、という説話である。ここでの「河東の練行の尼」の故事は『弘法法華伝』（唐・慧祥撰述。七〇六年以降）・『法華伝記』（唐・僧詳撰述。年代不明）にも掲載されるが、『冥報記』を直接参照したものと推測することが可能である。

『冥報記』については、このほかにも『日本靈異記』説話との関連性や影響関係を論じた論考が多くあり、研究の一定の進展を見ている。⁴

日本にのみ『金剛般若経集験記』の古写本が現存していることは、いづころから知られるようになったのかは不明である。橋本進吉氏は、その『金剛般若経集験記』の古写本を紹介する解説で、「靈異記の著者は集験記を見たりと断定して謬らざるべく、序にいふ般若檢記は集験記をさすものなるべし。随つて、集験記は当時既に我が国に伝来したりしものと断ずるを得べし」と指摘している。⁵ 岩淵悦太郎氏の論考は、その後の発表

となる。⁶ よって、『日本靈異記』に登場する「般若験記」が

『金剛般若経集験記』であり、後述する『靈異記』中巻第二十縁の「大唐の徳玄」の典故が、『金剛般若経集験記』であることを説いた最初の人物は、橋本氏ということになる。

『金剛般若経集験記』の概要については、藤善真澄氏が次のように述べている。

敦煌出土の仏典類中、『金剛経』が多いことからわかるように、中国では最もよく誦誦された經典の一つであり、『金剛経』信仰が民間へ流布するに伴い、さまざまな靈験譚を生み、それがまた信仰をおおる役割を果たした。唐初すでに蕭瑀の『金剛般若靈験記』が出ており、献忠はこれに唐臨の『冥報記』、郎余令の『冥報拾遺』などからの抄出、さらに親しく見聞したものを加えて編纂しなおした。

段成式の『鳩異』、王起隆の『新異録』、周克復の『持験記』など、後につづく説話集に大きな影響を及ぼしたが、わが『日本靈異記』も『冥報記』などとならんで『集験記』を参考にしたことを序文に記している。⁷

また、小林芳規「唐代説話の翻訳」は次のように述べる。

『金剛般若經集驗記』三卷は、その序によれば、唐の玄宗、開元六年四月（七一八）に、梓州の司馬、孟獻忠が撰し、『金剛般若經』の靈驗談を集録したものであつて、卷上中下の三卷に、それぞれ二篇ずつを収め、卷上は救護（十九章）・延寿（十二章）、卷中は滅罪（三章）・神力（十六章）、卷下は功德（十章）・誠応（十章）に分かれています。その靈驗談は「今者取其靈驗尤著異跡剋彰經典之所傳耳目之所接集成三卷一分二六篇」とあるように、先行の『冥報記』『靈驗記』『冥報拾遺』から多く引用すると共に、自己の親しく見聞したものを取入れている。その内容からは当時の仏教の流布、經典の信仰の實際を知ることが出来るだけでなく、当時の一般社会の情勢と公私生活の情態を知ることが出来る。又、中国の後出の『三宝感応要略録』『持誦金剛經靈驗功德記』にその材料を提供している。⁽⁸⁾

いずれにせよ、『金剛般若經集驗記』については、上巻序文のほかの情報がないのが現状である。

そこで、『日本靈異記』と『金剛般若經集驗記』の説話にお

ける影響関係であるが、矢作武氏は、『日本靈異記』は「翻案説話」であり、「机上に虚構し創作した志怪小説・仏教説話集」であるという見解を述べている。矢作氏の指摘をまとめる⁽⁹⁾と、

上16 『集驗記』中巻・滅罪篇3「任五娘」

上25 『集驗記』下巻・誠応篇1～6「清虚」／中巻・神力

篇8～13「清虚」

中24 『集驗記』上巻・救護篇3「寶徳玄」

下9、35、37 『集驗記』上巻・延寿篇4「王陀」

下22 『集驗記』下巻・功德篇2「趙文若」

となる。ことに中24については、「最も直接的翻案」と言っている。ことには、

また、新編日本古典文学全集本の「日本靈異記関係説話表」には、

中24 上巻・救護篇3「寶徳玄」

下22 『集驗記』下巻・功德篇2「趙文若」

下35 『集驗記』上巻・延寿篇4「王陀」／5「魏旻」

というように、関連性が指摘されている。

『冥報記』と比較した上で、『金剛般若経集験記』にはどのような特徴があるのだろうか。

ひとつは、『金剛般若経集験記』は『冥報記』の成立後に書かれた説話集だということである。

前述したように、『冥報記』は永徽年間(六五〇～六五五)の成立。『金剛般若経集験記』は玄宗の開元六年(七一八)の成立。『金剛般若経集験記』には『冥報記』の説話をそのまま引用して「唐臨冥報記曰」として説話を展開しているものがある(上巻20「陳公大夫人豆盧」)。そして、『金剛般若経集験記』は『冥報記』より新しい——より景戒の時代に近い——説話を掲載しているという点も指摘できる。

もうひとつは、『冥報記』と『金剛般若経集験記』とは、説話編纂の目的や主題が異なっているという点である。

『冥報記』は「善悪」や「因果応報」の真实性について序文や各説話で主張を展開してきているが、『金剛般若経集験記』は〈般若の力〉が絶対であることを強く主張している。『金剛般若経集験記』の〈般若の教え〉は『金剛般若経』の持つ力という主題に具現化されており、序文の主題としては『金剛般若

経』の威力を強調している。これは『金剛般若経集験記』の説話内容の単純さ・単調さ、という弱点に繋がるかもしれないが、この書物を享受する層にとつては、「主題の先鋭化」「主題の純化」を達成しているとも受け取ったかもしれない。

よつて、景戒が『冥報記』と『金剛般若経集験記』の二書を挙げたのは、おそらく偶然ではなく、たまたま思いついた書名を挙げたものでもなく、二書の性格を縦糸・横糸のようにして構築しようという意図があったのではないかと考える。

よつて、『冥報記』の説く〈因果応報の真実〉と、『金剛般若経集験記』の説く〈經典の力〉の強調は、中国典籍の後続である『日本靈異記』にとつての両輪の主題と考えたのではない¹⁰⁾か。

二、『金剛般若経集験記』の經典説話と『日本靈異記』

益田勝実氏は、「経の説話—観音靈驗譚の変貌—」の中で、〈経の説話〉〈法の説話〉という概念を提示している¹¹⁾。特定の經典の語句や経文を背景として持つ説話は〈経の説話〉。「因果の理」というような仏教の教理の具現としての説話」が〈法の説話〉だ、というのである。益田氏は、いわゆる中国六朝時代の

『觀世音心驗記』を（經の説話）の例として挙げてはいるが、唐代の『金剛般若經集驗記』も全編（經の説話）に満ちあふれていると言っている。

そして、「般若の力」「誦經の力」などと、經典の不可思議な力、神秘的な威力を強調した語句は、『日本靈異記』『金剛般若經集驗記』ともに見られる。『冥報記』ではその現れ方はやや異なる。

出雲路修氏は、下巻第二十一縁の「般若の験の力」について、

金剛般若經集驗記所収説話には「力」の語を含む表現を有するものが少なくない。「豈非般若力乎」（救護篇）、「信知般若之力不可思議」（神力篇）など。本書でも中巻二十四縁に「被般若力」とあった。

と述べている。

稿者の考えるところの、『日本靈異記』における（經の力）説話は以下の十四話である。原文と説話の概要を挙げる。

①上18 観音験力

（法華經の一字だけ覚えられない人が、前世で法華經の一字を焼失したためであると知り、懺悔してその經を補修する）

②上28 猶因験力

（役小角説話。孔雀王の呪法を駆使する）

③上32 但謂自非三宝神力

（鹿を殺して捕まる。大安寺の仏像の前で誦經したら大赦

となった）

④中6 示於大乘不思議力

（法華經を木の箱に入れようとしますが、寸法が合わず入ら

ない。誓願を發し悔過を行うと箱に入った）

⑤中20 誦經之力

（娘が悪夢を見たので誦經する母。七人の僧が屋根の上

にいるので家を出て見ようとすると、壁が倒れて助かる）

⑥中24 依大乘力／被般若力

（栖霞嶋は、三人の鬼に冥界に連れて行かれそうになる

が、牛肉等を饗応して、身代わりを立てて冥界行きを免

れる。また、金剛般若經の誦誦によって鬼達の罪も免れた）

⑦下1 大乘不思議力

（永興禪師関係説話。法華經を誦持する僧が熊野の山奥に

入る。死んで白骨になっても舌だけ腐らず、誦経の声が止まなかった。)

⑧下4 其威神力

〈金貸しをしている僧が、返済を怠る婿によって、海に投げ込まれる。僧は方広経を誦すると、海水がくぼんで助かる。〉

⑨下10 読経免火難之力再示

〈牟婁の沙弥はつねに法華経の写経・読経をしていた。火事で家が全焼しても、法華経だけは焼け残った。〉

⑩下13 是乃法花経神力

〈鉢山の落盤事故で閉じ込められた坑夫。坑夫はかつて法華経を写経した途中であることを訴える。沙弥が現れ食料をもらう。坑夫は救出される。〉

⑪下14 今示威力

〈千手経の呪を誦する優婆塞が役人に縛られ打たれる。優婆塞が言葉を発すると役人は空中に浮遊、墜落して死ぬ。〉

⑫下21 般若験力

〈沙門長義は盲目であったが、金剛般若経集を誦して治癒する。〉

⑬下23 斯乃発願之力

〈大伴連忍勝は私寺を造り、大般若経を書写しようとしていた。殺されるが、地獄で三人の僧から許されて、五日後に蘇生した。〉

⑭下34 奇異之力

〈巨勢咎女は病気を治すために般若心経を誦する。忠仙という行者は、治癒のために薬師経・金剛般若経・観世音経・観音三昧経を読むように言う。発病から二十八年を経ても治癒する。〉

『金剛般若経集験記』は、全編、経典（『金剛般若経』）の靈異や験力を誇示・称揚する話であるが、その中でも、特に経典の「力」が強調されている説話は以下の通り。¹³

①上巻 救護篇 序

若持若誦、護國護身。投烈火而不然、溺層波而詎没。般若之力量、其大矣哉。故以救護之篇、冠于章首。

②上巻 救護篇 1 柳儉

以此證驗是誦般若功德之力也。

③上巻 救護篇 11 韋利克勤

遍向親知說此征驗，嗟歎般若之力不思議。

④上卷 救護篇 13 郭守瓊

少即漸遠。則知般若之力，通于幽明。

⑤上卷 救護篇 17 陳惠妻

因念誦之力，漸覺身輕，所懷鬼胎，即自散滅。

⑥上卷 延壽篇 23 王陀

誦金剛般若晝夜不捨。六日已過，誦經之力，更不被追。

⑦上卷 延壽篇 25 陸彥通

據此靈驗，并是般若之力。

⑧上卷 延壽篇 27 慕容文策

父母親知，并悉忙怕，以禮慰喻，說其因緣，蒙放還家，功德

之力。

⑨上卷 延壽篇 28 袁志通

據此因緣，并是法華般若之力。于後蠻破，官軍放還，專心誦

持法華般若，不敢怠慢。

⑩上卷 延壽篇 30 釋德遵

德遵自此之後，常以般若爲務。則知大乘之力，豈術數能知。

⑪中卷 神力篇 5 劉弼

令讀金剛般若經一百遍，善神來援。此樹隔舍擲著大街巷中

竟。般若之力其大矣哉。

⑫中卷 神力篇 10 楊體幾

般若之力，火不能燒。合州之中，莫不驚異。

⑬中卷 神力篇 12 清虛

其東北兩面，屋檐并被火燒。信知般若之力，不可思議。

⑭中卷 神力篇 16 清虛

咒既無驗，即誦金剛般若經。及誦一遍，其聲漸小，至于三

遍，其聲即斷。迄于天明，寂然安靜。故知般若之力，不可思

議。

⑮中卷 神力篇 17 清虛

則知般若之力，二乘之所不知，凡俗聞之，皆能起謗。

⑯下卷 功德篇 11 楊簡

由經之力，則知隨說之處，諸佛之所護持。

⑰下卷 誠心篇 15 清虛

遂竭誠至心誦金剛般若，二更將盡，雨遂滂沱。比及天明，一

尺以上。周回五百裏內，甘澤并足。威神之力，巍巍如是。從

此祈雨，便向豐國寺坐夏。

⑱下卷 誠心篇 21 劉瑗

遂令文展念誦般若，至心祈晴。啓□□經，應時雨霽，至甲子

日，天甚晴朗。般若之力，其應若□。

いずれも、經典を読誦することによって、困難を回避したり、不思議な出来事が起こったりする説話である。

一方、『冥報記』においては、「○○之力」という表記はない。經典の功德をたたえる語句は、二例にとどまる。

中18 豆盧 「誦經之福」

中19 李山龍 「誦經之福」

『冥報記』には、「中18・豆盧」説話が、『金剛般若經集驗記』上巻・延寿篇20として引用されている。

これらの検討から、經典の「力」を強調する説話は、『金剛般若經集驗記』に多数見られ、『靈異記』がその影響を受けた可能性があること、そして『冥報記』は經典の「力」を強調する意図はきわめて希薄であること、などが推測できる。

三、「聖」と「凡」の対比と經典の力

ここで、⑮中巻、神力篇「17清虚」を見ることにする。

去神龍二年十二月十一日、齊州義淨三藏及景闍梨、奏清虚

入内祈雪。二七日、雖得少分、未レ能普足。勅語清虚…「阿師祈請、雖レ不能稱意、任阿師選寺住好否?」其僧自恨祈請不レ稱聖意、遂答勅云…「實不歡喜。」大德等見作此對、亦皆失色。阿師既觸天威、即合レ付法。勅又云…「如得雨雪、即與阿師亂彩二百段、兼授阿師五品、并作薦福寺綱維、阿師何意、遂不歡喜?」答云…「幸蒙天恩、驅使祈請雨雪、自恨上不覆天心、下不允人望、愚誠徒懇、不愜聖心、夙夜兢懼、唯知待罪、濫荷天恩、所以不喜。」勅云…「且放阿師出外念誦、還須祈請、忽得雨雪、即須進狀。」因便奏云…「此度不降雨雪、即爲一切衆生燒指。」又降勅曰…「朕喚阿師來供養、可遣阿師來受苦?又父母遺體、豈可毀傷。阿師必不レ得漫有傷損。」食訖、辭聖上出、即向南山炭谷瀧湫上一祈請雨雪。雖重複雪下、終不能稱心。更移就索曲村安樂佛堂中誦金剛般若、又經二七日、時得薄雪、還不稱心。遂即發願燒指兩節、經二日一夜、燒未盡間、忽然四面雲合、雨雪參雜而下。衆皆愕然驚怪、二日始絕。百姓父老等、連狀欲奏、且于薦福寺共三三藏平章…「清虚昨城南燒兩節指、爲法界祈請雨雪、燒

盡兩節、衆人同看、所有骨灰、今亦見在。今朝村人大小欲爲塗藥、其兩指節還復如故。」三藏遂云：「此事難信、不近人情、伊是凡僧、未至羅漢、如何燒指已盡、更得却生。既非聖流、無有此事。」即語村人父老等急歸州縣知聞、直是將作妖惑、欲益彼損、却責老人、非但誑炫凡庸、亦是誣罔聖上。僧徒聞此、轉加不信。其僧既見衆人起謗、更入道場、啓請十方諸佛一切賢聖：「弟子爲法界蒼生、燒指祈雪、蒙諸天龍王等、應時降雪。又令弟子所燒之指、燼而重生。咸起謗言、不淨信、誤他四衆、墮于地獄。弟子今更發願誦般若經、兩日之間、願生指重落。」至二日、勤加念誦、兩節重生之指、還復更落。衆見指落、重起謗言：「阿師當時燒生、如今始落。」其僧即報衆曰：「且向城南前祈雪處、于彼養瘡、還遣重生、不知得否？」衆人同曰：「阿師似著狂病。」常行謗語。即往城南而養瘡、念誦不輟。至十五日內、指節又生長一節半、指甲亦出。衆人見者、莫不驚異。咸曰：「亦不足怪、此道人有一妖術。」則知般若之力、二乘之所不知、凡俗聞之、皆能起謗。

【大意】

神龍二年（七〇六）十二月十一日、齊州の義淨三藏と景阿闍梨は、清虚に宮中に入って雪を降らせることを勧め、申し上げた。十四日間、少しの量が降ったけれども、十分な量には達しなかつた。（帝は）清虚に勅を發して言うことには、「阿師はお祈りをして、もし思い通りにならなくても、阿師はすきな寺を選んで住むことはどうだ？」と。清虚は自ら祈請しても天子の意に答えられないことを遺憾としていたので、勅に答えて、「実は嬉しくありません」と言つた。大徳たちはこの答えを聞いて、みんな色を失つた。阿師はすでに天の威光に触れ、仏の理法に従おうとした。

勅には、「もし雨雪を降らせたなら、阿師に乱彩二百段を与えよう。それと、五品の官位に、薦福寺の綱維（事務員）の地位を授けよう。阿師はこれでも欲ばないか？」とある。答えて言うことには、「天子様の恩徳により、雨雪を祈りこいねがいましたが、残念に思うことは、天の意思は覆らず、地上では人望が十分でない。愚直に誠実さをつくして、聖なるみ心にはかなわず、朝早く恐れおののき、ただ罪あって罰を待つことを知り、天子様のご恩をになうことになりましたが、嬉しくありま

せん」と。

勅に言うには、「しばらく阿師を自由に外出させて経文を唱えさせて、帰還したら必ずお祈りをさせよ。雨雪が降ってきたら、ぜひとも進状せよ」と。よって（清虚は）奏上して言うには、「こんど雨雪が降らなければ、一切衆生のために自分の指を焼く」と。

また、（帝は）勅を下して、「朕は阿師を呼んで供養をさせ、阿師に苦痛を受けさせるのか？ 父母の遺体を、どうして毀損したりできよう。阿師を絶対傷つけることなどしない」と。食事が終わって、天子のもとを辞し、南山炭谷瀧湫上に向かつて雨雪を祈り続けた。ふたたび雪が降ったが、満足な量ではなかった。さらに索曲村の安樂仏堂の中に移動し、『金剛般若経』を讀誦して、七日を経て、そのとき、かすかな雪があったが、望み通りのものではなかった。ついに、發願して指の両節を焼いた。一日一夜を経て、まだ焼き終わらないうちに、忽然と四方から雲が集まり、雨雪がまじって降ってきた。民衆はおどろきおののき、雨雪は二日めにしてようやく止んだ。百姓父老たちは、薦福寺に、義浄三藏と一緒に、この不思議な現象を明らかにしようとして、連名状を奏上しようして、「清虚が昨日、城南にて指の両節を焼き、法界のために雨雪を祈願して、

指の両節を焼き尽くした。民衆はみんなその様子を見たし、焼けた指の骨灰も今はある。けさ村人は塗り薬を付けようとしたら、両指の節は元どおりになった」と。

義浄三藏は、「信じられない。人の心がわからない。（清虚のような）こんな凡僧、まだ羅漢にも至っていない。どうして指を焼き尽くして、また更に生えてくるなんてことがあるのか。」「聖流」ではない。こんなことはありえない」と言った。

そこで、村人・父老たちは急いで州県に帰って（この奇跡を）知らせ聞かせると、たちまち「妖惑」をなすなどとされて、利益を得るつもりが、かえって損になり、かえって老人は責められ、ただ「凡庸」を「誑炫」（あざむきだます？）し、また、天子を「誣罔」（あざむきいつわる）するものだとされた。ある僧侶はこれ聞き、不信の念が増した。その僧は、すでにみんなが誹謗の言葉を投げかけるさまを見て、道場に入って、十方の諸仏・一切の賢聖に礼拝し、「弟子は法界の蒼生のために、指を焼き雪を祈ったら、諸天龍王たちが時に応じて雪を降らせてくれた。また、弟子の焼いた指は、燃え残りからふたたび生えてきた。みな誹謗の言葉を起し、本来の清い心言いが立っていない、他の四衆をまどわし、地獄に落とさせる。弟子は今更に發願して『般若経』を讀誦し、二日の間、指が生えて

(燃え残り)が落ちるのを願った」と言った。

二日たつて、努めて經文を唱えたら、(清虚の)両節から指が生えてきて、(燃え残り)が落ちた。民衆はこの様子を見て、重ねて誹謗して、「阿師は即座に指を焼き、それを今始めて落ちたかのようにみせている」と言う。その僧は民衆に向かって、「しばらく城南に向かつてすすんで雪を祈願したところ、その傷の治療をして、やっとなおつたのだ。わかりますか?」と言った。

民衆は同じく、「阿師は「狂病」をあらわしたかのようにだ」と言い、常に誹謗の言葉を発する。城南に住んで傷を治し、經文を唱えるのは止めない。十五日のあいだに、指の節がまた長く生えて一節半になって、指のつめまで生えてきた。民衆は見て、驚異に思わない者はなかった。みなが言うのは、「これは怪しむに足りない。この修行者は妖術を持っているのだから」と。すなわち、これは般若の力であることを知る。(この境地は、自己の救済だけにとらわれる)二乗の人たちの知らないところであり、「凡俗」はこれを聞いても、みな誹謗するだけなのである。

清虚が皇帝の命令で、雨雪を降らせることを祈願し、『金剛

般若經」を讀誦したあと、自分の指を焼く。すると雨雪が降り、清虚の指もともどつた、という説話である。

ここでは、清虚の奇瑞を認めない者は「凡俗」であり、清虚を「狂病」「妖術」として誹謗する。しかし、清虚の奇跡を信じる者にとっては、清虚は「道人」である。それは「般若の力」でもある。つまり、「般若の力」を信じない者は「凡俗」である、ということになる。「般若」の反対にある概念が「凡」であるとも言ってもよい。この「凡」の対極にある概念は『日本靈異記』では「聖」となる。例えば、上巻第四縁では、

誠を知る、聖人は聖を知り、凡人は知らず。凡夫の肉眼には賤しき人と見え、聖人の通眼には隱身と見ゆと。斯れ奇シク異しき事なり。

とある。ここでの「聖人」は聖徳太子。「凡夫」「凡人」には「乞食の人」が、卑しく汚れた存在に映り、「聖」としての姿は見えない、ということになる。「聖人」である聖徳太子には「隱身」として真実の姿が見える、というものである。「隱身」が「聖」であることは、「隱身の聖人」(中一・下三十三)、「隱身の聖」(中二十九)などにより明らかである。¹⁵⁾

そこで、『金剛般若経集験記』所収の清虚説話を経過することにより、「聖」般若の力」の図式が浮かび上がってくるとも言えよう。

清虚の説話では「聖意」「聖上」とあるように、「聖」は皇帝の側でもある。一方で「聖」は仏の側でもあるので、「聖」は王法と仏法に振り分けられる。この二重性は矛盾しない。そして、この性格は『日本霊異記』の「聖」と「凡」の関係性と共通している。^⑤「凡」は天子（聖徳太子）の深淵なる意図を受け取れないのだ。『金剛般若経集験記』では、すべての「驚異」は「般若の力」ということにされ、そこに包摂される。

四、おわりに

景戒は『金剛般若経集験記』に触れることによって、経の力の絶大なること、またそれを記した書物の存在を知り、『日本霊異記』の真实性を証明する強い根拠として採用するに至ったのではないか。

周知の通り、『霊異記』の序文には、因果応報の理、善悪の応報の真実が標榜されている。『金剛般若経集験記』序文も「般若」の賛美から、「今」の「霊験」「尤著」「異跡」「剋彰」

を記録したとある。その「霊験」は經典の持つ力によって起こされると考えていたと思われる。その經典（『金剛般若経』）は「般若」の世界を体現し、「般若」に包摂されていると考えたのではないか。

今回は、『金剛般若経集験記』説話の論理を考察することによって、同書が『日本霊異記』に影響を与えた可能性について論じた。残された問題については追って考究したい。

注

- (1) 中田祝夫校注・訳『日本霊異記』（新編日本古典文学全集、小学館、一九九五年）。以下同じ。
- (2) 内田道夫編『校本冥報記』（東北大学文学部支那学研究室、一九五五年）、伊野弘子訳注『冥報記全釈』（汲古書院、二〇一二年）など参照。
- (3) 小林芳規「唐代説話の翻訳——『金剛般若経集験記』の訓読について」『日本の説話7 言葉と表現』東京美術、一九七四年、築島裕「輪王寺天海蔵金剛般若経集験記古点」（書誌学）復刊六号、一九六六年十一月、呉光燾「『金剛般若経集験記』研究」（金知見・蔡印幻編）新羅佛教研究」山喜房佛書林、一九七三年）など参照。
- (4) 八木毅「日本霊異記と冥報記」（『日本霊異記の研究』風間書房、一九七六年）などがある。
- (5) 橋本進吉「黒板勝美氏蔵古鈔本 金剛般若経集験記解説」（『黒板勝美氏蔵古鈔本 金剛般若経集験記』古典保存会、一九三五年三月）。
- (6) 岩淵悦太郎氏「日本霊異記の序に見えたる般若験記とは何か」（『国語と国文学』第十二巻第八号、一九三五年十二月）。

- (7) 藤善真澄執筆「金剛般若經集驗記」(今泉淑夫編『日本仏教史辞典』(吉川弘文館、一九九九年)。
 (3) 小林前掲論文。
- (8) 矢作武「『靈異記』と中国文学」(山路平四郎・国東文麿編『古代の文学4 日本靈異記』早稲田大学出版部、一九七七年)。
- (9) 拙稿「日本靈異記」と『金剛般若經集驗記』——神身離脱説話をめぐって——(大東文化大学「日本文学研究」第五十二号、二〇一三年二月)、「日本靈異記」と「冥報記」——般若験記——序文の思想と製作意図——(大東文化大学「日本文学研究誌」第十・十一輯合併号、二〇一三年三月)参照。
- (11) 益田勝実「経の説話——観音靈驗譚の変貌——」(『日本文学』第十九卷第七号、一九七〇年七月)。
- (12) 出雲路修校注『日本靈異記』(新日本古典文学大系、岩波書店、一九九六年)。
- (13) 『金剛般若經集驗記』の本文は、『新纂大日本統蔵経』第八十七卷(国書刊行会、一九八八年)に依る。石山寺蔵古鈔本・黒板勝美蔵古鈔本・高山寺本を参照して改訂した箇所がある。以下同じ。
- (14) 本文は(2)伊野前掲書。方詩銘輯校『冥報記 広異記』(中華書局、一九九二年)も参照した。
- (15) 「隱身の聖」説話については、出雲路修「隱身の聖」(『日本国現報善悪靈異記』の世界(二)——「説話集の世界」岩波書店、一九八八年)丸山顯徳「隱身の聖説話」(『日本靈異記説話の研究』桜楓社、一九九二年)、伊藤由希子「仏と天皇と「日本国」——『日本靈異記』を読む(べりかん社、二〇一三年)などがある。
- (16) 狩谷根斎『日本靈異記攷証』の大東急記念文庫所蔵版本の自筆書入れで、上四縁の「聖人知聖凡夫不知」について、「三国志」卷二十三・魏書二十三・杜襲伝「天惟賢知賢、惟聖知聖、凡人安能知非凡人邪」、「潜夫論」卷二政第九「惟聖知聖、惟賢知賢」を指摘する(小泉道

『日本靈異記諸本の研究』清文堂出版、一九八九年。かかる発想がい
 わゆる「外典」から来ている可能性があることは興味深い。

【付記】本稿は、佛教学会例会(二〇一四年四月二十六日、於大東文化
 大学)での口頭発表をもとに、加筆補正を行ったものである。席上、ご教
 示をいただいた諸氏に深謝申し上げる次第である。